

第1回 川越市総合教育会議 会議要旨

令和3年7月26日（月）午前10時00分～午前11時30分

川越市役所東庁舎2階 教育委員会室

川越市長 川合善明

教育長 新保正俊、 教育長職務代理者 梶川牧子、

委員 長谷川均、 委員 嶋野道弘

1 開会

2 市長挨拶

おはようございます。本日は令和3年度第1回川越市総合教育会議にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

この会議は、首長と教育委員会が教育行政・教育政策の方向性を共有し、一致して推進するための、貴重な意見交換の場となっております。

これまで、川越市の教育大綱の策定、不登校やいじめの問題、新学習指導要領、小中学校の適正規模・適正配置など、色々な問題について幅広く意見交換をさせていただきました。

限られた時間ではございますが、本市の教育行政にかかる課題を共有し、子ども達の教育環境を一緒になって整えられるよう、皆さまと努めてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

3 協議事項（ ●…市長 ◎…教育長 ○…教育委員 ▲…事務局 ）

▲ 議長については、「川越市総合教育会議設置要綱」第4条第1項の規定に基づき、市長にお願いすることになっているが、より活発な意見交換をする観点から、形式的な進行を事務局側で進めることも考えられるので、まずは、その点についてお諮りしたい。

● 提案があったので、進行を総合政策部長に進めていただきたいと思いますというかがか。

<異議なし>

● それでは、総合政策部長の進行で進めていただきたい。

(1) 川越市の特色ある教育について

▲ 協議事項1つ目の「川越市の特色ある教育」について、教育長から説明をお願いしたい。

◎ この度、教育委員会の方向性を示すものである第三次川越市教育振興基本計画を策定した。私の考えと第三次川越市教育振興基本計画を踏まえて、特色ある川越市の教育について、資料を作成したので、この資料を基に説明したい。

川越市の教育理念である「生きる力を育み未来を拓く川越市の教育」に基づき、特色ある教育を進めていきたいと考えている。これまでも、川越市教育委員会では、様々な取組や事業を実施してきており、学力向上と豊かな心の育成をはじめとした生きる力の育成に取り組み、一定の成果も出ている。豊かな心という観点でみると、中学3年生の段階で、非常に良い状況にあると思っているのだが、その一方で、学力については、ここ数年、全国平均を下回っているという状況があり、深刻に受け止めている。中学校3年生の学力は、全国や県の平均と同じか、上回っているが、小学校4年から小学校6年生にかけては、全国や県の平均よりも低いという状況にあることから、小学校に特に力を入れていくことが必要だと考えている。

学校教育では、最終的には、資料のとおり、社会貢献ができる、プロとしての職業人になる、学び続ける、より良い主権者である、より良い子育てができる等の目的があるとする。これらは自己実現であり生きる力である。本市では、この目的を達成するために、「志を高く持ち、自ら学び考え、行動する子どもの育成」と「郷土に誇りをもてる子どもの育成」の2点を第三次川越市教育振興基本計画の目標に掲げている。「命、学び、地域」をキーワードに進めていきたいと思っており、その中でも特に、学力向上に取り組んでいきたいと思っている。探求心、健康な心と体の育成を図りながら学力向上に努めていく。

これまで川越市では、一本筋を通した、これを強化していきたいというものが、やや見当たらなかったのかなと反省している。このことについて、全国学力調査等の分析や、現在の各学校の児童生徒の状況から、言語力の強化が必要だと考え、国語を中心に、言語力の育成を基礎とした学力向上に努めていきたいと考えている。具体的には、現在、授業の充実に取り組んでおり、「川越授業スタンダード」という授業の展開例に基づき、これを毎年見直しながら、話す力や書く力を中心とした言語能力の育成を着実に進めていきたい。また、これと合わせて、読書力の向上が必要ではないかと考えている。市全体として、小学校入学前の子供から、大人も含めて、読書推進を図る取組を進めていかなければならないと考えている。現在も読書推進に取り組んでいるが、小学校低学年からの読書推進には、さらに力を入れていかなければならないと考えている。現在、小江戸読書マラソンで成果を上げた子供については、教育長からの表彰状を出して、読書に関心を持たせるような取組を行っているが、さらに川越市立図書館と学校図書館の活用や、就学前の子どもへの支援などにも力を入れ、読書推進を図っていきたい。このように、主に「川越授業スタンダード」と読書推進をあわせて、特に言語能力の強化を、川越市の特色ある教育として進めていきたい。

このほかに、3つのキーワード「命、学び、地域」の中の「地域」について、川越市に対する誇りと愛着の心を育む教育も進めていきたい。川越市には歴史や文化遺産が豊富にあるが、これを知らずに育っている子どもが多いと思うので、川越市に関する学習を、総合的な学習の時間で進めていきたい。現在、川越市への誇りと愛着の心を育む教育について、各学校で取り組んでいるが、さらに、市全体として、学校間の格差が無いように計画を立てて進めているところである。特に、現在は、博物館にも担当指導主事がいるので、教員を入れながら計画を練って、博物館との連携の準備を進めているところである。また、現在は、地域人材の不足や自治会加入率の低下などの状況があり、学校の地域人材活用でも大変苦勞しているところであるが、地域への誇りと愛着を育むことで、長期的には、地域や学校に貢献できるような人材を育てられるように着実に取り組んでいきたい。そのほか、総合的な学習の時間には、今後重視していかなければならない環境問題等についても取り組みたい。市の政策としても、「小江戸かわごえ脱炭素宣言」を出し、学校に、わかりやすい資料を配っていただいているので、そのような市の政策も含めながら取り組んでいきたい。このような総合的な学習では、今回導入したICTタブレットを豊富に活用し、言語能力を駆使して、子ども自身の発信力を強化していきたい。これらの学習を進めるにあたっては、探求的な学習や言語学習を通して、地域の未来を切り拓く人材の育成を着実に進めていきたいと考えている。それから、この度、ICTタブレットを全生徒に、電子黒板を全学級に入れていただいた。これについて、教員、子どもがどのような意識なのか、課題は何かがあるのか把握するために、スキル調査、指導力調査を行った。資料は、それを取りまとめたものなので、これらも参考にさせていただければと思う。

▲ 教育長から、提案理由を含めた内容を御説明いただいたが、各委員からの御意見等があれば挙手をお願いしたい。

○ 先ほど、教育長からも話があった基本理念の中の「生きる力」については、2006年以来これまで変わらずに持ち続けている。その中で、教育長からは、人間性、人間力、学力、健康、体力という「知徳体」を養うことが大切であるという話があった。前期の計画では「生きる力と学びを育む川越市の教育」という基本理念を掲げており、今期は「生きる力を育み未来を拓く川越市の教育」に変わったが、「生きる力」は変わらず掲げている。昨年度からのコロナ禍をみて、この基本理念こそが、教育の根幹ではないかと改めて思った。そして、生きる力、生き抜く力を養うことこそ、一番大切なことではないかと痛感している。この生きる力を身に付けるにはどうしたらいいのかと思っていた時に、偶然にも、教育長から、この資料を頂戴した。この中にある読書推進については、教育長からも説明があったが、私としてもとても大切なことだと思っている。読書をすることは、学力として、字が読めるようになるだけでなく、人間は人生が一回きりで、自分の人生しか体験できないが、本を読むことで、他者の経験を疑似体験したり、色々な世の中をみたりすることができるので、思いやる心や、表現力、理解力、コロナ禍のような大変な事態に直面した際の洞察力や方向性を選択する能力などを学ぶことができ

る。国語の教科書で、長文の中の一節を読むだけではなく、きちんと本を読むことによって、子ども達に、そのような力をつけていってほしいと強く思う。川越市はもともと読書を推進しているが、小学校1年生から、本をすごく好きになって、楽しいと思うようになるためには、親御さんが家庭で育てている時期や幼稚園や保育園に行っている時期からの繋がりが必要だと思う。御家庭までは、なかなか声が届かないかもしれないが、幼保小の連携を利用して、幼稚園や保育園のころから、絵本をみたり、子ども達が本に親しむような教育を行っていただけたらと思っている。

それから、ICT教育の報告があったが、川越市は、まだ始めたばかりなので、これから、色々な問題が生じてつまづくことも沢山あると思う。このアンケートの結果をみると、「面白い」など肯定的な意見も多いのだが、否定的な意見もあるので、先生方が否定的に感じている部分を大切にしながら進めていっていただきたいと思う。そして、先生方に申し上げるのは恐縮だが、ICT教育は、あくまでもツールであって目標ではないということを考えていただきたい。中には、「私は、使うことができないので、使わないで授業をしている」という先生の言葉があったが、その方も良い授業をされているのかもしれないので、使わないで授業をするということを単純に否定することなく進めていっていただきたいと思う。

川越市の特色ある教育としては、川越市は読書日本一というぐらい、子どもから高齢者まで、読書を推進していただけたらと思っている。

- まず、ICTのアンケート結果を読ませていただいたが、結果としては、生徒と教師の両方で、概ね満足度が高いという結果がでていたので安心した。ICTの使用目的としては、例えば、主体的に学べる、一人ひとりに合った学習をすることができる、家庭学習に使える、不登校児童生徒の学びの確保などの目的があると思うが、ぱっと見て、「楽しい」や「面白くなった」という意見が多くあることはよかったと思う。やはり授業は、楽しくないと成立しないと思うので、取組のはじめの段階で「面白い」とか「楽しい」という意見が、多くでてきたことは良いことだと思う。ただし、課題もあって、ひとつとしては、今、話しがあったが、ICTはあくまでも道具であり、どう使うかは教師力にかかっていると思うので、教師力の向上が何よりも大事になってくると思う。それに伴って情報マナーの問題、セキュリティや個人情報の問題などにしっかり取り組んでいかないと、いじめの原因になったり、犯罪にまではならないとは思いますが、そのようなことが起こる危惧もあるので、そのあたりの対応を平行してやっていく必要があると思った。ただ、このアンケート結果をみた感想としては、良い形でスタートしたと思う。

それから、川越市の特色ある教育については、テーマが難しいが、少し広い視野から、話をさせていただきたいと思う。まず、基本姿勢として、川越市は中核市であるので、新しいことに先駆的に取り組んでいくということが、市民や地域、他の市町村から期待されていることだと思う。教育でも、その教育分野ではどこよりも率先して、先駆的に新しいことに挑戦するという姿勢こそが本来の川越の特色だと思うので、トライ・アンド・エラーで、何事にも、他の市町村に先駆けて、挑戦的に挑んでいくことが、総論でいくと川越市の特色になるのではないかと思う。そのために、何かひとつでも、この分

野なら川越市の教育が一番素晴らしいと言われるような、地域で一番、できれば日本で一番が望ましいが、そういうものを、目指していければ良いと思っている。そのことが結果的に、自信に繋がっていくのだろうと思う。

そのことで、少し具体的に考えてみた。2つあるが、1つ目は、ICTに取り組んでいるので、ICT教育日本一を目指すという目標を掲げることが良いと思う。御存じのように、川越市はICTの整備が非常に遅れていたが、ここで、国の補助金等を活用して、スタートラインに立つことができた。そのことを逆手にとってICT教育日本一を目標に、他の市町村の模範となるように取り組んでいけば良いのではないかと考えている。そのための方法論としては、非常に難しいことだが、先ほど言ったように、PCはあくまでも道具であるので、使いこなすことができる教師力を、まず一番に高めていくことが必要だと思う。

また、市長にお願いなのだが、教育委員会だけでできるような仕事ではないと思っているので、国がデジタル庁をつくったように、市全体の中で、専門の部署である仮称ICT情報管理部といった、川越市全体としてICT日本一を目指すような仕組みを是非構築していただきたいと思う。市長部局で専門の部署をつくることで、犯罪とか詐欺などの色々な問題や、個人情報等も含めて、市の中で一元化して対応していくことができれば良いと思う。

2つ目は、川越市の特色というところ、教育の中身の話になってしまいがちだが、中核市であるため教育センターを独自に持つことができているので、教育センターを日本一の施設にすることが良いのではないかと考える。そして、学力向上やICTの問題などでは、教師力が不可欠になってくるので、教育センターの役割は非常に大きいと思う。やはり、人を育てていくことが一番大事なので、教育センターに人・物・金・情報を投入して、質の高い教師を育成して輩出していくことが、結果的には川越市の教育の向上につながるものと考えられる。

余談になるが、今、コロナ禍の中で、御存じのように、リモートワークが盛んになっている。リモートワークが増えて、東京で高い家賃や交通費をかけるよりも、首都圏近郊に住みたいという人が多くなっているようだが、実際に、川越市では、今、不動産が盛んになっている。そういう意味から、川越市を選ぶ人が増えている。川越市にはもともと、歴史、文化、伝統という強みがあるが、それにプラスして子どもの教育環境が整ってくれば、川越市が、住む場所としての大きな選択肢になってくるのではと思う。私の考えでは、教育環境が整っているということは、まず、安全安心に学べるということ、学力が高いこと、スポーツの良い指導者がいること、設備と環境が整っていることだと考える。これだけではないと思うが、大きな要素だと思っている。

多くの市町村で、学力向上のために色々な取組が行われているのだが、川越市の強みである歴史、伝統、文化に加えて、教育環境を整えられれば、川越市には是非住みたいという人が、これからどんどん出てくると思うので、是非、川越市として取り組んでいただきたいと思う。

○ 川越市の教育の基本ビジョンを御説明いただいて、なるほどと納得し、また、賛同も

するのだが、こういう理念や色々な考え方をどうやって形にするのかということが、一番大事なのではないかと思う。形にして、見えるようにすることが施策として大事になってくる。私の情報と、いくつか調べたことを10項目ほど申し上げる。

形にするレベルで一番大きいものは、義務教育学校をつくることである。これは、校長を1人置いて、9年制の学校をつくるもので、埼玉県内でも、小中一貫の義務教育学校として、春日部市立江戸川小中学校の事例がある。校長を1人置いて、9年間のカリキュラムを作っているものなので、レベルとしては一番大きいと思う。

その次に大きいレベルのものとしては、小中一貫校がある。義務教育学校と違うのは、それぞれ、小学校の校長1人と中学校の校長1人を置いて、カリキュラムを一貫させていくというもので、施設を新しくつくること無くできるので実現可能だと思う。例えば、川越市でも垣根一つで、小学校と中学校が隣接している学校があるが、こういうところは環境的に非常に恵まれていると思う。

3つ目は教育特区で、法的な規制を緩和することを特別に認めてもらって特例校を設けること。例えば、その市の独自の教科をつくることも可能になる。こういった工夫は、川越市でも考えられないことは無いと思う。

4つ目は教育課程の弾力的運用というもので、6月28日の読売新聞で、小中学校の授業時間の配分を変えるというものが取り上げられていた。つまり、施行規則によらずに、各教科に配分する時間を、各学校の裁量で決めることができるというもので、8月から、研究開発学校で、特区校を募集して、来年度から始めるということであった。目黒区では、二十数校が文科省の特例校として、40分授業を午前中に5時間行うということで試行的に取り組んでいたが、そのように教育課程や時間割等を工夫するという方法がある。

5つ目が、現行の教育課程の中で工夫すること。例えば、総合的な学習の時間などは、その地域に特色ある教育活動をどんどん取り入れられる。今、川越市が進めているような、学社連携、あるいは博物館との連携教育を一部の教員だけではなくて、市全体に広げることなどが考えられる。

6つ目は、今、取り組み始めているものではあるが、コミュニティ・スクールに徹底して取り組むこと。博報堂教育財団こども研究所が、コミュニティ・スクールで、学校と地域がどう変わるのかというデータ調査をしていて、その中の一つに、保護者の地域愛着と居留意向の比較というデータがあって、コミュニティ・スクールをやっている学校とそうでない学校を比べると、コミュニティ・スクールをやっている学校の方が、保護者の地域への愛着が、高くなっていることがわかる。また、この場所にずっと住みたいかという居住継続意向というのも、コミュニティ・スクールをやっている方が高くなっているというデータも出ている。コミュニティ・スクールによって、学校が変わるだけでなく地域も変わるという良い傾向が出ていると思う。

7つ目は、秋田の大館市がやっていたのだが、百花繚乱作戦といって、各学校で、これだけは日本一になれるというものを掲げて、それを進めるというもの。

8つ目は、やはり ICT は形にするための一つとして挙げなければならないと思う。これについて、どのように取り組んでいくのかによって、恐らくこの1年間で相当な格差

ができると思うので、色々な取組を進めなければならない。これについて、データをいただいているのだが、このデータで子供と教員の両方を比較していることは大事なことだと思う。つまり、私が気になるのは、子どもの受け止め方と教員の受け止め方にどれだけギャップがあるのかということで、ギャップが無い方が望ましい。子どもも先生も両方が良いと言っていれば、取組が進む。現時点では、そんなに大きなギャップが無く、アンケート結果の一番はじめの部分だけを見ても、子どもの方で、「とても学習がしやすくなる」、「どちらかというとしやすくなる」と回答したのは85%で、教員の方で、「評価している」、「どちらかという人评价している」と回答したのが96%となっており、教員の意識が非常に高いと言える。ただ、教員の方が、評価していないと回答した理由があるのだが、ここは要注意だと思う。つまり、新しいものが始まった時には、一般的傾向として、何か理由をつけて、やろうとしないということが起こる。例えば、「使用目的が明確でないまま、取組だけが先行しているように感じる」あるいは、「時期尚早の中で学習コンピューターを配布した」、「まだ準備が整っていないのでやれない」等、こういう意見は新しいことを始めると必ず出てくるので、とりあえず、引き続き取り組んでいくことが一番だと思う。そういうふうにICTに取り組んでいくという方法がある。

9つ目が、川越市は中核市であるので、教育センターを独自に持っているのだが、少し言葉が過ぎるかもしれないが、施設そのものが少しお粗末だと思う。それから、美術館があり、博物館があり、当然のことながら公民館があり、図書館があり、スポーツ施設が非常に沢山ある。これらを、教育とうまく連携して、社会教育と学校教育が繋がるようなものをもう少し考えなければならない

最後に10番目になるが、行政組織の改善が必要だと思う。文科省がPISA学力で、世界の中での順位が落ちた時に、学力を上げるために、学力担当部署を設けた。全国学力調査担当部署を、きちんと設けたりしているのだが、そのようなプロジェクトチームとか、特化した課を設置するなど、コンピューター担当の部署を整備することが考えられる。

以上10項目になっているが、私が言いたいことは冒頭で申し上げたように、形にして市民全体に見えるようにするというのに、これから取り組まなければいけないということである。

- 皆さまから大変有意義な御意見を頂戴してありがたいと思うのだが、お金がかかることに関しては、正直言って、俄かには対応できない部分が多いと申し上げざるを得ない現状がある。特に、新型コロナの関係もあり、昨年度から、おそらく来年度いっぱいぐらいまでは、税収に相当の影響がでて、色々やりたいことも先送りしなければならないような状況があるということは、ひとつ御理解いただきたいと思っている。

それと、私自身の意見としては、教育長から出された言語能力の育成を中心とした学力向上について、これは中学生ぐらいにならないと、適応できないかもしれないが、読書力だけではなく、発言力というか、話す能力を訓練することが必要ではないかと思う。これは学力とはあまり関係ないと思うのだが、話す能力を義務教育の中で、訓練する場があっても良いのではないかと思う。広い意味では、国際社会で、他の国の人達に太刀

打ちできるような人を育てるという意味でも、話す能力というのはかなり大切なので、中学生ぐらいになったら、そういったことを、一定程度実施してみても良いのではないかと思っている。

- ◎ 市長からの言語能力とコミュニケーション能力に関する御意見について、言語能力は、論理、思考、知的活動の基盤になるだけでなく、コミュニケーション能力や話す力の基盤にもなる。さらに、豊かな心を育む基盤にもなることから、日頃の授業で培って、知識、理解を確かなものにすることができるよう、取り組まなければならない課題であると考える。

▲ それぞれお話を伺ったところで、御意見等があればお願いしたい。

- お願いになるのだが、郷土に誇りを持てる子どもの育成というのが入っているが、なんと言っても、川越の特色は歴史、伝統、文化になると思う。自分が生まれた故郷に愛着を持つためには、子どもの頃の教育が大事だと思っているので、総合的な学習等で、徐々に行われるとは思っているのだが、できれば教材や ICT だけを使って、教室内で教育するというのではなく、実際に行ってみることなどを通して主体的に学ぶようにしていただきたいと思う。さらに、その結果を学校のホームページ、市のホームページや広報川越などに積極的に発表していく、そのような形で教育を進めていただければ良いかなと思っているので、これについては是非検討していただきたい。

- 言語能力はもちろん大事だが、社会が変化しているので、少し視野を広げなければいけないのではないかと。言語といっても、文字言語だけでなく、例えば、算数、数学などでは数式を理解しなければいけないように、記号などもしっかり読んでいかなければいけない。

言語能力を高めようとしても、背景に色々な体験がないと、言葉になってこないもので、体験は非常に重要であると思う。それから、OECD が PISA 学力で示している読解力の範囲は非常に広いのだが、市長がおっしゃったコミュニケーション能力に加えて、プレゼンテーション能力も大切だろうと思う。

読書指導についても、有名な読書感想文コンクールとして、読売読書感想文コンクールなどがあるが、博報堂教育財団では、昨年からは、読書推せん文コンクールというものを始めた。例えば、小、中、高校生が、父親に対して推薦文を書いたりしていて、短い文章ではあるが、なかなかユニークで面白いと思う。

この背景には芥川賞や直木賞ではない賞を出そうということ、本屋大賞が始まって、定着してきているということもあるのだと思うが、そのように発想を変えてやってみることが大事なのだと思う。

- ◎ 読書推進の取組の中で、よく読書感想文をコンクールに出すということがあるが、自分の読んだ本について、読んでもらいたい人に宛てて、紹介文を書くということであれ

ば、抵抗なく取り組めるのではないかと思う。以前に市長とも、2、3行の短い文章でも良いので、読んだ本を紹介する文章を書くのも良いのではないかと話をしたことがあった。そういったことにも取り組んでいきたい。

また、今年度、サントリーホールディングス協賛の青少年読書感想文コンクールで、県内から、4人入賞していて、そのうち3人が川越市内の学校であった。高等学校が2校なのだが、川越市には、読書に慣れ親しむ素地はあるのかなと思う。

- 私学で、読書に熱心に取り組んでいるところでは、文章がとても上手だと思う若い方が沢山いらっしゃるのので、読書をすることで、特に文章を書くことが上手になるのだろうかなど実感している。ただし、その子その子の能力によって、感想文が上手に書けなかったとしても良いので、本の中で色々なものを感じて、自分で生き抜く力をつけてほしいと思う。それを川越市の教育の軸としてほしいと思うし、是非、読書をそのように活かしていただきたいと思う。
- 高校などで、校舎に「全国大会出場」等の垂れ幕を下げている例があるように、市役所の建物に、教育関係の取組についての大きな垂れ幕を下げることはできないか。学校をつくることから垂れ幕を下げるまで、レベルの違いはあるとしても、形にして見えるようにするということが大切だと思う。
- 今の御話に関連して、以前、川越市のある建設会社の方が、中学校の工事の際に、仮囲い等に「ストップいじめ」という掲示をしてくださった。子どもの目に入ることで、みんなの意識になっていくので、大切だと思う。海外では、工事現場に「こどもを大切に」などの掲示があったり、そういった声かけというのが多いのだが、日本では海外に比べて少ないと思う。是非、川越市役所で垂れ幕を下げていただいたり、まちの人みんなの意識に訴えるものができたら良いと思う。
- 川越市には、伝統、文化、環境などがあり、それに加えて先ほど挙げた教育センターをはじめとする色々な教育施設があって、相当に充実していると思うのだが、宝の持ち腐れのように感じる。

学力向上は、これだけ社会の変化が激しいと、ペーパーの上の学力だけではなくて、実社会と結びつけた学力向上に取り組んでいかないといけないと思う。

昨年、埼玉県が全県の中から良い取組を見つけて広めるために推進事業をやっていて、ビデオをつくっているのだが、富士見中の国語の教員の取組が取り上げられていた。富士見中の教員は蔵造り通りをテーマにして意見文を書くという授業をやっていたのだが、実際に、目の前に実物があるものだから、子ども達は、学力差があるとは思えないくらいに、みんな活発に動いていた。つまり、生活経験を出せば議論になっていくので、基礎学力も大事だけれど、そのようなやり方も、学力を上げるやり方としては良いのではないか。

◎ 川越市には色々と豊かなものがあるので、それらを活用し、探求的な学習を通して、子ども達の言語能力を育成していくというようにして、教育に結び付けていくことも大切なことであると思う。

▲ 他にはいかがか。特に意見が無いようであれば議事1のテーマは以上にさせていただく。

(2) 学校を支える地域の在り方について

▲ 協議事項2つ目の学校を支える地域の在り方について、教育長より説明をお願いしたい。

◎ 先ほどの議論でもあったが、これからの学校は、地域なくしては課題を解決していくことが難しい状況にある。平成27年には、中央教育審議会から「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」という答申が出されているが、この答申には、人口減少を克服し、地方創生を成し遂げるため、人口、経済、地域社会の課題に一体的に取り組む必要があることや、学校と地域はパートナーとして相互に連携・協働していく必要があり、そのことを通じて社会総掛かりでの教育の実現を図る必要があることが明記されている。キーワードは「社会総掛かりでの教育」ということである。

現在、学校が抱える問題は複雑化、困難化している。その原因には、家庭教育が困難な状況にあることや、子どもたちの規範意識が薄れていることなどの問題がある。家庭や地域が教育の場としての機能を十分に発揮すること無しには、子どもの健やかな成長はありえないので、社会の幅広い教育機能を活性化していくことが喫緊の課題である。学校を核とした地域全体を学びの場と捉え、活性化していくためには、今後、新たな地域コミュニティを創出していく必要があり、教育委員会では、現在取り組んでいるコミュニティ・スクールを、令和5年度から全校区で取り組もうと準備を進めている。「開かれた学校」とよく言われるが、そこから一步踏み出して、地域の人々と学校の目標やビジョンを共有することで、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」に転換していくことが大切だと考えている。今までの「開かれた学校」では、学校の情報を地域や保護者に伝えることが中心だった。これも大切なのだが、今後は、学校の在り方、考え方、目標などを地域や保護者と共有していくことも大切になってくると思う。

また、社会教育施設と学校がつながることも大切である。先ほどの議論にもあったが、博物館や公民館などの社会教育施設が豊富にあるので、そこと学校がつながって双方向の関係を持つことも大切なことであると考えている。

それから、現在、学校を支える地域の在り方について、私が感じている課題が2点ある。1点目として、少子化の進行で生じる学校の小規模化による教育上のデメリットが顕在化していると考えている。対策として学校の統廃合も考えられるが、学校がなくなることによって地域コミュニティが衰退してしまうことも懸念される。学校の小規模化を改

善することとだけでなく、地域コミュニティの衰退も考慮し、市の実情に応じた学校づくりを推進することが求められていると考える。

2点目の課題は、地域人材が不足していることである。教育に協力できる人材を増やしていくということはなかなか難しいことで、市を挙げて取り組まなければならない重要な課題と考えている。例えば、川越市への誇りと愛着を育むことができるような人材の育成に力を入れていくことや、川越市のコミュニティづくりに参画できる人材、具体的に言うと自治会に参加できるような人材の育成というところに長期的に力を入れて取り組んでいく必要があると考えている。地域人材の不足をどのように改善していくのかは、学校を支える地域の在り方についての難しい問題である。

- 地域と学校の関わりについてだが、コミュニティ・スクールが増えてくれば、学校運営協議会などを通して、学校と地域との関わりは自然と増えてくるだろう。ただし、運動会などの大きな行事の共同企画や参加することを、急に始めるのは難しいだろうし、地域の人が学校に自由に出入りすることは防犯上の理由で難しく、課題として乗り越えていかなくてはいけない。

子どもサポート推進事業や放課後子ども教室の話が出ていたが、子どもサポート推進事業は、児童生徒のニーズと合致していない。子ども達はコンピューターなどを使って遊んでいるので、昔の遊びなどを教えていても参加者が少なく、教えている方もやりがいがない状況になっている。また、協力者は、高齢者が多く若い人がほとんどいないことも問題である。高齢化で地域人材の確保ができない問題があり、事業として実施が難しくなっている。今の方法のままでは、子どもサポート推進事業の継続は難しいと感じている。そもそも、地域で子どもサポート推進事業を認知している人がほとんどいないのではないかと。広報の問題があるのではないかと思う。

一方で、放課後子ども教室は、女性の社会進出が進み、共働きの家庭が増えたことで、居場所づくりとしてできたもので、保護者から喜ばれている。例えば、ある学校では子どもの居場所づくりの中で、退職した校長や教師や地域の人達に協力していただいて、勉強のサポートをすることで、川越市の課題である学力向上のために時間を使っている。そもそもこの事業は、子どもサポート推進事業の協力が無いとできない事業であるので、地域の方から昔の話を聞くなどの取組を行うなどにより一体化したほうが良いと思う。

地域人材の問題では、PTA役員などの余計なことはやりたくないという風潮がある。特に民生委員などは、子どもと高齢者を看なくてはいけないのでほとんどなり手がいない。同じ人がずっとやっている状況に追い込まれており、深刻な状況である。具体的に地域と学校で何ができるのか、できることは2つあると思っている。

1つは防災教育である。「川越市の教育」という冊子にも防災教育の内容が掲載されているが、小学校でも中学校でも力を入れて防災教育をやっている。台風や地震などの災害が起きた際には、学校の体育館や教室が避難場所とされる。今は場所を提供することに限られているが、避難計画も含めて防災計画などを学校と地域で共同して作っていくというようなことが、地域と学校の関係をつくる早道になるのではないかと思っている。

もう1つはエコ、環境の教育である。川越市では環境経営、SDGsなどの取組を推進している。学校では環境教育を行っているが、地域の中でエコや環境に対してどのように取り組んでいくのかを一緒に考えていくことも一つの方法であると思う。そういうことを通して地域との繋がりを具体的につくっていく。その先で地域と学校の密接な関わりができるようになると思う。

最後に学校の統廃合の問題だが、少子化の中で統廃合を検討していくと思うが、学校や生徒との関わりを楽しみにしている地域住民がいる。卒業した母校がなくなることへの反対も根強く、総論は賛成でも各論になると反対意見がかなり強くなるのではないかと。統廃合について、少子化を理由にするとかなりの反対が予想される。実際にできるかどうかかわからないが、小学校同士や中学校同士の統廃合ではなく、川越市は9年間の小中一貫教育を目指しているので、例えば、小学校と中学校の統廃合を目指していくと、反対は少なくなるのではないかと。9年間を通した教育ということを目的として、統廃合を考えていくことが現実的だと思う。

その一方で、詰め込み教育から主体的に学ぶアクティブラーニングへの移行を考えると、少人数学級の方がむしろ効果が大きいかとも考えられ、少人数の学校があっても良いのではないかと。ただし、例えば運動会や修学旅行などある程度の規模が必要な行事については、地域の中で連携するなど、学校の統廃合だけではなく、ソフト面で色々な形のやり方を考えていくのも良いと考える。

- 今の意見を受けてだが、少子化による統廃合について、色々な形のものがあっても良いとの意見に賛成である。子どもの数が減ることには、デメリットだけではなくメリットもある。発想を変えれば、学校を無くさなくてもできることがあるという考えに賛成である。

それから配布資料の内容に関係するが、現状で、参加者が限られる、参加者が高齢化する、コミュニティの維持が難しくなっている、PTA役員や民生委員など学校や地域を支える仕事のなり手がなくなっているなどの状況は、現代社会を象徴していると思う。望ましい状況ではないので改善していかなくてはならない。

3つの事業が挙げられているが、コミュニティ・スクールは地域とともにある学校づくりの推進、子どもサポート推進事業は学校応援団活動、放課後子供教室は学習支援や体験活動、交流活動であるというところに大きな違いがあると見ている。子どもサポート推進事業と放課後子供教室は、学校への応援や支援という意識で取り組まれており、この意識を変えなくてはいけないと思っている。つまり、地域と共にあるというのは、部外者として応援することではなく、自分達が主体者であるということで、それがコミュニティ・スクールの理念でもある。そういう意識でやっていかなければならない。

「地域丸ごと学校」という冊子の中に、いろいろなキャッチコピーがある。「地域が子どもを育てるんじゃない、子どもが地域を育てるんだ。」というように発想を転換するもの、「地元をこんなに身近に感じたのは今日が初めてだ。」というコピーもある。これからの学校は、いかにして、地域で子どもを身近に感じられる社会にしていくか、学校に対して応援や支援をするという意識でやるよりも、子どもも地域も学校も主体者として

一体的にやれるイベントをつくっていくという発想が非常に重要である。現状の問題点として挙げられた深刻な問題には、相当に発想を変える必要があり、解決が難しいことだが、取り組んでいかなければいけない。

それから、地域と教育が一体化している実例もある。例えば「武州・入間川プロジェクト」というものがある。これは、武州ガス株式会社、国土交通省荒川上流河川事務所及び公益財団法人埼玉県生態系保護協会が主体となり、入間川流域で環境保全活動を行っている市民団体等に活動助成をしているというもので、まさに一体的に活動している。

川越市でも今後、統廃合の問題が出てくると思うが、自分達の学校が無くなることに對しては大変な抵抗があるので、時間をかけて意識を変化させていかないと進まないと思う。京都市の場合、隣接の学校同士で統合した後、さらに地域内の学校を1つに統合していくなど段階を踏んでいるようだ。こういうことも必要ではないか。

- とても難しい問題だと思う。学校を支える地域の在り方を考えるには、学校が地域に何を望んでいるのかを明確にしなければ、難しいのではないかと思う。先ほど、他の委員がおっしゃったように、地域の側が、学校に行き、あれやってみようこれやってみようと言っても、学校が求めているものでなければ、あまり意味がないのではないか。学校と地域がともに主体的にという考え方が理想的なので、コミュニティ・スクールなどの場で、学校側は何を求めているのかを地域にお話して、地域側も子ども達にどういうふうに育ててほしいのかを話して、共通の見解を持つことではじめて進んでいくことではないかと思う。

それで考えたのだが、私立の学校には、特定の地域はないけれど、子ども達を上手に育てている学校もあるが、公立学校というのは、支えてくださる地域があるので、これをアドバンテージとして考えることができるのではないかと思っている。だから、このことをどうやって公立学校のアドバンテージにしていくかということをお話しながら、学校が求めるものと地域が求めるものを共有していくべきだと思う。そのためにはコミュニティ・スクールが中心になるのではないかと思っている。学校は課題が沢山あって解決するのは、地域なくしては大変だというお話だったが、地域を大きな後援者としてとらえていくのが一番ではないかと思う。

また、先ほど川越市を知るという話の中で、川越市の良さを知り、欠点を知ることを含めて愛着が形成されていくのだなと思った。雑談になるが、今年度の都立高校の社会科の入試問題に、1ページを使って川越市の地図が出て、それに対する設問があった。なぜ私がお話を知ったかというのと、その試験監督の中に川越市出身の若い方がいて、それを見た時にすごくうれしかったと連絡をいただいた。外に出て、川越市はいいところだったんだなと、誇りになっていると感じた。川越市の歴史や、自分が住んでいる地域について学ぶということは大変大切なことだと思う。

- お願いばかりで申し訳ないが、学校を支える地域の在り方という話になると発想の転換が必要になってくるのだと思う。それで、コミュニティ・スクールにしても防災やエコ教育にしても、学校や教育委員会の取組に関わる人というのは、地域の中でも非常に

限られた人になってしまっている。こういう大事なことについては、ぜひ川越市の事業にしてもらいたい。川越市の事業になると関わる人の範囲がもっと広くなると思うので、かなり若い人達でも協力してくれる人達が出てくるのではないかと思う。是非、川越市がこれをやるんだという形にもって行っていただくことが大事だと思う。是非お願いしたい。

- 今いただいた意見に関連して、防災教育と環境教育に関して、教育委員会ではなく市の仕事として欲しいということであった。それは大変良くわかるので、考えていきたいと思う。防災教育については、ここ何年かはコロナ禍で中止しているのかもしれないが、南古谷で、随分熱心に子ども防災キャンプなどをやっていただいているので、そういったことを参考にしながら、行政として取り組んでいきたいと思う。

それと、学校の統廃合については、何人かの委員の方から、小中一貫校の形での統廃合も考えられるのではないかという意見があった。おっしゃる通りだと思うので、そういう方向性も探っていきたいと思う。

- ◎ 防災教育の市との連携協力について、今、霞ヶ関西小中、寺尾小中では防災教育の地域との連携が定着してきたので、これを全市的にコミュニティ・スクールを通じてやっていきたいと考えている。この度、防災危機管理室としっかり連携して、防災タイムラインというものを作った。今まで、市と学校の連携が希薄なところがあって、学校の負荷が高いということが多かったが、大分変わってきているのかなと思う。

それから、環境問題は深刻な状況にあるので意識していかないといけないと思う。私も川越市内を歩いてみているのだが、コロナ禍で、公園で宴会のようなことをやって、ゴミをそのまま捨てていっている状況がある。私の自宅の近くに公園があるのだが、あまりにもひどいので、朝、私が片付けるということがある。市制100周年を機会に、川に捨てられているプラゴミや道路端に捨てられているプラゴミなどについても、地域と協働して清掃活動をやるということも大切なのではないかと、担当課と話を進めているところである。

また、統廃合や小中一貫校については、地域の実情に応じた統廃合の仕方を考えていく必要があると思う。

- 学校を支える地域といっても、私が教育委員になってから川越市内の学校をずいぶん回っているのだが、学校ごとにすごく違いがある。大きさも地理的条件も、全ての面で色々と違いがある。だから、学校を支える地域の在り方を考えるには、画一的にはいかない。全ての学校が、同じようにはいかないはずだと思うので、その地域と学校に即したものを作っていくという発想で、コンセプトを作っていくてはならないだろうと思う。学校が地域に求めることだけでなく、地域が学校に何を求めるのかを運営協議会などで率直に話し合っ、学校運営の基本方針が作られていくのだと思う。もう一つは、地域の大人と学校に来ている子どもが一緒になって活動することによって、子どもを身近に感じられる地域づくりができるのだと思う。保育所や幼稚園に行くと、泣き声がう

るさいということで、肩身が狭い思いをして保育園経営、幼稚園経営しているという現実もある。実際にうるさいとしても、いくら配慮してもやむを得ない部分もあると思うのだが、やはり地域の側は部外者意識が非常に高いのだと思う。こういう状況では難しいが、その辺から考えていくことが大切であり、一律ではなくて、いかに地域に合ったものにしていくのかを考えていくことが必要だと思う。

- ごみ拾いの話があったが、私立の星野学園などでは、社会貢献部というのがあって赤間川の掃除などを、かなり積極的にやられている。市立高校こそ地域と密着していかなくてはいけない学校なので、そういうことを市立高校が積極的にやることで小中学校に見本を示していくということも一つの方法なので、それも是非検討していただきたい。
- 市立高校は、川越まちづくり科のような特別な教科をつくるなど、それくらい思い切ってやってくればいいのではないかと思う。
- 余談だが、観光科をつくったほうが良いと言ったのだが、なかなか人材などの面で難しいようだ。
- ▲ 他に意見がなければ、以上とさせていただきます。本日の会議の内容について、市長から総括をお願いしたい。
- 2つのテーマについて、それぞれ委員の皆さまから大変貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。いただいた御意見については、今後の川越市の教育行政に取り入れていきたいと考えている。

4 その他

特になし

5 閉会